

「なっちゃんは、ほっとけない」 第6話

水瀬真理佳

登場人物	
本田夏海	(16) 本田家の長女、高校2年生
西山凜	(16) 夏海のクラスメイト
藤井拓海	(16) 夏海のクラスメイト
橘龍太郎	(16) 夏海のクラスメイト
佐野聖也	(16) 夏海のクラスメイト
本田冬馬	(10) (13) 本田家の長男
本田春樹	(0) 本田家の次男
本田秋悟	(35) 夏海たちの父親
本田七海	(34) 夏海たちの母親
ナディア	(20) コンビニのアルバイト

○コンビニ・店外（夜）

夏海、外に設置されているゴミ箱のゴミ袋を取り替える。

いっぱいになったゴミ袋を持った時、視界が揺れてふらつく。

とっさにその場にしゃがみこみ、頭を押さえる夏海。

そこへバイトの新入り・ナディア（20）が夏海を呼びにくる。

ナディア「ナツチャン、モウ22時ヨ！」

夏海「あ、はぁーい！」

と、気丈に立ち上がる。

ナディア「ナツチャンみて。きょうガッコーのテスト、ひゃくてんだったヨ」

と、折りたたまれた日本語の小テストを見せる。

夏海「すごい、おめでとう！良かったね！」

ナディア「ナツチャンおしえるじょうず、お

かげ！アリガトウ！」

夏海「ナディアががんばったからだよ！私

でよければまたいつでも聞いてね」

と、ニッコリ笑う。

○スーパ―・店内（夜）

夏海、カートを押しながらトイレット
ペーパーや牛乳、卵をカゴに入れてい
く。

青果コーナーでは、

夏海 M 「冬馬好きだもんね」

と、西瓜をひと玉カゴの中に入れる。
続いてお菓子コーナーにて、

夏海 M 「春樹が好きなやつだ」

と、ポテトチップスをカゴの中に入れ
る。

アイスコ―ナーでは、桃味のカップア
イスを見て、

夏海 M 「美味しそう」

と、カゴの中に入れようと手を伸ばす
が、値段を見てやめる。

○マ
ン
シ
ヨ
ン・本
田
家・リ
ビ
ン
グ（夜）

誰もいないリビングのテーブルの上に
メモ書き。

「おかえり！　ねえちゃんにデザート

あるよ。冷凍庫見て！　冬馬　春樹」

と、春樹の字で書かれている。

冷凍庫の中には、スーパで買うのを
やめた桃味のカップアイスが入ってい
る。

パッと笑顔になる夏海。

夏海「せっかくだし、食べちゃおっかな」

と、アイスを取り出そうとした時、頭
痛に顔をしかめて頭を押さえる。

○同・リ
ビ
ン
グ（翌朝）

冬馬、起床。まだ誰も起きていない。
冷蔵庫から牛乳と卵を取り出し、ホッ
トケーキミックスを使って手際よくホ
ットケーキを作り始める。
そのうち春樹がトイレに起きてくる。

目を擦りながら、

春樹「あれ、ねえちゃんは何？」

冬馬「まだ。ゆっくり寝かせてやろ」

春樹「ねえちゃんがビリなんてめずらしい」

と、驚く。

○同・ベランダ

外はすっかり陽も高く上がっている。

二人で協力して洗濯物を干している冬

馬と春樹。

春樹「ねえちゃんぜんぜん起きないな」

冬馬「干し終わったらちよつと声かけてみる

か」

○同・和室

ふすまの外から声をかける。

冬馬「夏海ー？」

春樹「ねえちゃん入るよー」

と、部屋の中に入る。

布団で寝ている夏海、二人の声でよう

やく目が覚める。頬が赤い。

夏海「へ掠れた声で」ごめん、寝坊しちゃった」

冬馬が額を触ると熱い。

冬馬「熱測ろ」

と、体温計を持ってくる。しばらく脇に挟み、音と共に夏海が見ると37・

7度の表示。

夏海「うん、大丈夫」

と、数字を見せないようにしたのを春樹が奪い取る。

春樹「はいねえちゃんウソついたー」

と、冬馬にも見せる。

冬馬「今日は絶対安静な。コンビニには連絡しとくから」

夏海「これくらい薬飲んだらすぐ下がるよ」と、起きあがろうとするが、力が入ら

ない。

冬馬「へ夏海に」薬飲む前に、軽く胃に入れるもの作ってくる」

春樹「オレもやるー！」

夏海「二人ともごめんね……冷凍庫にいくつか作り置きあるから、もし足りなかったら何か買いに行ってもいいし、あと、」

と、次から次へと心配する。

冬馬「俺らのことは心配しなくていいから」

春樹「そーそー！ 冬馬のめんどろはオレが見るよ」

と、ドヤ顔。冗談を言って場を和ませる。

冬馬「こっちのセリフだよ」

と、春樹にデコピン。

二人がふすまを閉めて部屋を出ていき、ポツンと残された夏海。

夏海 M「熱なんて出したのいつぶりだろう……」

と、眠りに入る。

○（夏海の夢）マンション・本田家・和室

七海「夏海？」

母・七海（34）、お椀に入ったうどんをお盆に乗せて和室のふすまを開ける。

夏海「お母さん……！」

七海「具合はどう？　おうどんなら食べられそう？」

うどんは、わかめとハート型のかまぼこに小ネギが散らされた温かいもの。

夏海、コクリと頷く。

すると廊下をバタバタと大きな音を立ててスーツ姿の父・秋悟（35）が走ってくる。

秋悟「夏海が熱出したって！？」

夏海「お父さん！？」

七海「会社行つたのに、夏海が心配で有給とったんだって」

夏海「大袈裟だよお父さん」

と、クスクス笑う。

秋悟「だって、夏海が熱出すなんて珍しいからさ。風邪は父さんに移して、夏海は早くよくなるんだぞ」

と、優しい顔で夏海の頭を撫でる。

秋悟の心地良い手に目を瞑る夏海。

（夏海の夢終わり）

○マンション・本田家・和室

眠っている夏海の鼻腔をかすめる優し

い香り。冬馬の声で目が覚める。

冬馬「夏海、できたよ」

冬馬が持ってきたのはわかめとハート

型のかまぼこに小ネギが散らされた温

かいうどん。

夏海「これって……」

冬馬、頷く。

冬馬「母さんの味を思い出しながら作ってみ

た」

春樹「かまぼこはオレがハートにした！」

夏海「二人ともありがとう。いただきます」

と、優しく微笑みながら手を合わせる。

夏海「懐かしい……お母さんの味だ」

嬉しそうに顔を見合わせて拳を合わせ

る冬馬と春樹。

○同・ベランダ（夕方）

冬馬、乾いた洗濯物を取り込んでいる。
そこへ春樹が走ってくる。

春樹「（焦って）冬馬大へん！　ねえちゃん
が！！」

○同・和室（夕方）

ベッドで寝ている夏海の額には薄く汗
がにじみ、熱のせいで頬は赤く、浅い
呼吸を繰り返す。

ピピッ、と無機質な電子音が鳴り、冬
馬が体温計を確認。

39度と表示されている。

春樹「昼より上がってんじゃん！」

夏海「だいじょうぶ：：薬切れただけだから」
しかしその声は掠れ、昼間よりも明ら
かに辛そうな夏海。

冬馬「病院行こう。春樹は新しい冷えピタ頼

む」

春樹「分かった！」

冬馬、A Iに【入谷 救急対応の病院】

と入力。提示された病院ひとつひとつにスピーカーで電話をかけていく。

スタッフの声「はい、入谷中央病院救急外来です」

冬馬「姉が39度の熱があって、今から診てもらえますか？」

スタッフの声「お姉さんの年を教えてください」

冬馬「16歳です」

スタッフの声「16歳女性ですね。飲食はできてますか？」

冬馬「はい、お昼に。薬も飲んだんですけど、

どんどん熱が上がってきて……」

スタッフの声「息苦しさや胸の痛みはありませんか？」

夏海は小さく首を横に振る。

冬馬「それは……ないみたいです。でもお昼

よりも明らかに辛そうで」

スタッフの声「わかりました。他にどこかご連絡されてますか？」

冬馬「いえ、まだです」

スタッフの声「でしたら先に他の医療機関にご連絡いただいた方がいいかもしれません。現在こちらがかなり混み合っていて、来てもらってもかなりお待たせしてしまう可能性があります」

冬馬「どれくらいですか……？」

スタッフの声「そうですね……今の状況だと二時間はみていただいた方がいいと思いますます」

冬馬「そうなんですネ……」

スタッフの声「もし意識が朦朧として、呼吸が苦しくなる、水分が取れなくなるような場合は、迷わず救急車を呼んでください」

冬馬「……分かりました。別の病院にも連絡してみます……ありがとうございます」

と、電話を切る。

続けて二軒目に電話。

スタッフの声「はい、台東中央病院救急外来です」

冬馬「すみません、16歳の姉が朝から熱が下がらなくて、今39度あります。さっきからずっとぐったりしていて、飲食も昼が最後で、とにかく辛そうなんです！」

スタッフの声「申し訳ありません、現在発熱のある患者さんの受け入れを停止しております、まして、もし症状が悪化しているようでしたら、救急要請をご検討ください」

冬馬「もちろんそれは分かってるんですけど、そちらで診てもら——」

と、話している間に電話が切れる。冬馬の表情が不安で雲っていく。

春樹「もういいよ、きゅうきゅう車よぼうよ！」

と、スマホを持つ冬馬の腕を掴む。
冬馬「……（か細く震えた声）そう、だな」

冬馬、順番に119を押していくが、

その指先は震え、最後の発信が押せない。

春樹「冬馬……？」

冬馬、何かに抗うような必死な表情。
それを宥めるように、夏海の熱い手が重なる。

冬馬「へハッとした表情……！」

夏海「冬馬、いいよ。私は大丈夫だから」

冬馬、情けない自分への怒りと安堵が入り混じった複雑な表情で唇を噛み締める。

そんな冬馬を見て、

夏海「……なんか……急に桃が食べたくなっ

ちやったなあ。冬馬買ってきてくれる？」

と、わざとわがままを言う。

冬馬「それはいいけど、でも今はまず病院に

……！」

と、珍しく余裕がない。

夏海「……じゃあ桃食べたなら絶対行く、約束する」

と、引かない夏海。

冬馬「（仕方なく）……分かった。すぐ戻るか

ら！」

と、スマホを持って部屋を飛び出す。

夏海「ゆっくりでいいから！ 走らないで

ね！」

と、冬馬が出て行った開きっぱなしの

ふすまに向かって精一杯の声を出すか、

おそらく冬馬には届いていない。

夏海、小さく息を吐いてふと春樹の方

を見る。

不安げな顔で冬馬が出て行った方を心

配そうに見つめる春樹。

夏海「春樹？」

春樹「さっき冬馬がへんだったのって、オレ

のせい……？」

夏海「（即答）それは違う。そうじゃないん

だけどね、多分冬馬は……」

夏海の話に目を見開く春樹。

○ 商店街・通り（夕方）

商店街の中を全力疾走する冬馬。
八百屋の前まで来るが、臨時休業の貼り紙。

冬馬「なんでこんな時に限って……！」
踵を返して走っていく。

○ 大通り・スーパー・店内（夕方）

夕飯の買い物客で賑わう店内。
冬馬、青果売り場に直行。複数種類ある桃を片っ端からカゴに入れてレジに急ぐ。

○ スーパー・店外（夕方）

冬馬がスーパーを出ると、救急車と人だかり。
ストレッチャーで運び込まれるのを見て、呼吸が荒くなり、激しい動悸。

○（冬馬の回想）小学校・体育館

照明の落とされた体育館。

並べられたパイプ椅子には、生徒や保

護者が座り、舞台に注目。

舞台の中央で照明を浴びる冬馬（1

0）、緑の衣装を着てピーターパンを演
じる。

冬馬「（堂々と）さよならじゃない。またい
つか、必ず会えるさ！」

冬馬のセリフで劇は幕を閉じ、体育館
の中は拍手喝采。

幕前に生徒たちが並び、冬馬の掛け声
に続いて観客に挨拶。

冬馬「ありがとうございます！」

生徒たち「ありがとうございます！」

歓声の中、客席の中央前方で拍手して
いる父・秋悟と母・七海に向かって嬉
しそうに手を振る冬馬。

○（冬馬の回想）同・中庭（夕方）

生徒たちが出てくるのを待つ保護者た

ち。

帰りの会が終わったクラスから次々と生徒が校舎から出てきて保護者と合流。

冬馬も秋悟と七海の元に走ってくる。

秋悟「あ、ピーターパンが来た！」

七海「冬馬上手だったよー！」

冬馬「へ得意げに」あったり前じゃん！」

秋悟「父さんもネバーランド行ってみたくないな

あゝ」

冬馬「へあっさり」父さんは多分ムリ。筋肉

って重いから、妖精の粉があっても飛べな

いよ」

秋悟「そうかあダメかあゝ。冬馬は物知りだ

な」

と、冬馬の頭を撫でる。

七海「さ、一緒に帰ろ！今日の夜は冬馬の

好きな牛井にするよ」

冬馬「オレハンバーグがいー！」

七海「え、ハンバーグ！？」

冬馬「あとオレ友達と遊んで帰るから先帰っ

てて！」

冬馬、ランドセルとサブバッグを秋悟に持たせて校庭に走っていく。

秋悟「夜ご飯までに帰ってくるんだぞー！」

冬馬、秋悟の声に走りながら手を挙げ
て反応。

七海「じゃあ買い物して帰らないと」

秋悟「スーパー寄って、春樹の保育園行けば
ちようどいいよ」

秋悟と七海が並んで帰っていく。

○（冬馬の回想）同・校庭（夕方）

冬馬、友達何人かとサッカーをしながら
校庭を走り回る。

遠くから救急車や消防車、パトカーの
サイレン音が、小学校からほど近いと

ころに集まってくる。

男子1「めっちゃサイレン聞こえる」

男子2「なんかあったんじゃないかね？」

冬馬「行ってみよ！」

面白半分で音のする方へ走って行く。

○（冬馬の回想）大通り・歩道（夕方）

道路沿いに並ぶ緊急車両。

大型トラックが歩道に乗り上げ、木を

薙ぎ倒し、空き店舗に突っ込んだ様子。

フロント部分は大破。

あたりには血痕もあり悲惨な状況。

現場は規制線が張られ、野次馬で溢れ

る。

冬馬たち、大人の間をすり抜けて最前

列まで進む。

救急隊員に押されてストレッチャーが

二台、続けて前を通り過ぎて救急車の

方へ行く。顔は見えない。

その後ろから、警察官がボロボロに潰

れたランドセルと、見覚えのあるエコ

バッグの荷物を持ってくる。

冬馬「（呆然と）なん……で……」

と、規制線の中に入っていく。

男子 1 「おい、冬馬！」

男子 2 「何やってんだよもどれって！」

同級生が声をかけても、吸い込まれるように救急車の方へ走って行く冬馬。

冬馬 「ウソだ：：ウソだ、ウソだ！」

警察官 「入ってきちゃダメだよ！」

と、冬馬を止める。

冬馬 「はーなーせ！」

と、警察官の腕の中で暴れる。

警察官 「もしかして君の、」

警察官が何か言いかけるのを遮る。

冬馬 「（言い聞かせるように）ちがう、そんなわけない！」

と、叫ぶ。

重症者を乗せた救急車が再びサイレンを鳴らし、次々に出発する。

何もできずただ呆然と見送ることしかできない冬馬。

頭の中にサイレンの音が鳴り響く。

（冬馬の回想終了）

○ スーパー・店外（夜）

冬馬、救急車の扉が閉まる音で我に返る。

サイレンを鳴らし、救急車が出発。

冬馬、居ても立っても居られなくなり走り出す。

○ 通り・横断歩道（夜）

来た道を全速力で戻る冬馬。

桃が入ったレジ袋がカシヤカシヤと音を立てる。

冬馬、歩行者信号が赤なのも気づかず飛び出す。

ハッと気づいた時には、バイクが迫ってくる。

冬馬、咄嗟に反対の歩道に飛び込み、バイクも急ブレーキをかけて寸前と

ころで停まる。

バイクを脇に停め、ヘルメットを外しながら冬馬に駆け寄ったライダーは凜。

凜「大丈夫か！？」

冬馬の顔を見て驚く。

凜「夏海の弟……」

冬馬「（複雑そうに）西山、凜……」

凜、あたりに転がった冬馬の桃を集めて冬馬に渡す。

凜「……桃、好きなのか？」

冬馬「夏海が……（ハツとして）夏海……！」

冬馬、自分が何をしていたのか思いだし立ち上がるが、膝の痛みに顔を顰める。

飛び込んだ時に擦りむいた膝から血が出ている。

凜「（真剣に）夏海に何かあったのか？」

冬馬、手をグッと握り締める。

冬馬「（震える声で）助けて……夏海がっ

……！」

○マンション・本田家・玄関（夜）

玄関のドアが開いた音で春樹が走って

くる。

春樹「冬馬！！　どうしようやっぱねえちゃんツラそうで……え、りん？」

冬馬と一緒に帰ってきた凜の姿に驚く。

冬馬「話は後、夏海を病院連れてくぞ」

春樹「だって、でんわしたけどどこもダメだったじゃん！」

凜「少し離れてるけど、一箇所すぐに診てくれる病院がある。春樹、これでタクシー呼べるか？」

と、自分のスマホでタクシーアプリを開き春樹に渡す。

春樹「うん、分かった！」

そして冬馬に向かって、

凜「保険証と、薬手帳あれば準備頼む。夏海は？」

冬馬「……奥、リビングの向かいにある和室」

凜、頷き、

凜「お邪魔します」

と、靴を揃えて家にかかる。

冬馬、凜の動作を見逃さない。

○同・和室（夜）

凜、ふすまをノック。

凜「夏海、入るぞ」

一応声をかけるが夏海の返事はない。

凜が中に入ると、頬を紅潮させ苦しそ

うな夏海。

うつすらと目を開ける。

夏海「……にしま、くん？　なんで……」

凜、布団の横に膝をつく。

凜「……ったく、一人で頑張りすぎなんだよ」

と、夏海の額にそっと手を置く。

そこへ春樹と冬馬もやってくる。

春樹「タクシ―呼べたよ！　五分でくる！」

冬馬「……俺も、準備できた」

凜「よし、じゃあ行くか」

凜、夏海を抱き上げて立ち上がる。

○病院・救急外来入り口（夜）

一台のタクシーが到着。

夏海を抱えた凜と、冬馬、春樹が車を降り、病院の中へと急ぐ。

○同・診察室前（夜）

夏海を抱えて来た凜を見て、看護師がストレッチャーを持ってくる。

看護師「こちらにどうぞ」

夏海をストレッチャーに寝かせ、看護師と共に診察室の中へ。

○同・診察室・中（夜）

ストレッチャーに横たわる夏海を医師が診察。

医師「多分軽い熱中症ですね。疲れも重なったんでしょう。点滴して一晩様子見れば大丈夫」

春樹「あゝよかったあゝ」

と、肩の力を抜いて天井を仰ぐ。

夏海「ごめんね……しんぱいかけて」

と、掠れ声だが、穏やかな表情。
一方冬馬、拳を握りしめ顔を強張らせている。
凜、その様子を少し離れたところから見つめる。

看護師「じゃあお部屋に移動しましょうか」

○同・病室（夜）

四人床だが他に患者はいない。
夏海、点滴に繋がれて眠っている。

春樹はベッド横の椅子に座る。

冬馬、部屋の中を見回して、

冬馬「そいえばアイツは？」

春樹「あれ、部屋に来るまではいたのに……」

春樹、部屋の外を見に行くが廊下はしんとして誰もいない。

春樹「りんにありがとう言わないと」

冬馬「……そうだな」

冬馬も春樹の隣に椅子を持って来て座る。

春樹、隣に座る冬馬をチラッと見る。

春樹「へ申し訳なさそうに」冬馬ごめん。オレ、きゆうきゆう車のこと知らなくて……」

冬馬「夏海から聞いたんだな」

春樹、頷く。

春樹「冬馬はじこのばしょにいて、お父さんたちがはこばれていくの見たんだって」

冬馬「・・・春樹が謝る必要なんてない。悪いのは俺。夏海が苦しんでんのに自分のこと優先して、最低な弟だよな」

春樹「冬馬は悪くない！ 家族がじこにあつてはこばれていくの見たら、だれだってこわくなるに決まってるじゃん！」

冬馬「……それだけじゃないんだよ」

春樹「なにが？」
と、首を傾げる。

冬馬「……父さんたちが事故に遭ったのは、俺のせいなんだ」

と、声を震わせる。

春樹「え？　なんで……？」

冬馬「あの日俺がハンバーグ食べたいとか言わなきゃ、二人はスーパーに行かなくて良かった……真っ直ぐ家に帰ってれば、事故に遭うことなんてなかったんだよ」

冬馬、自分の太ももに爪を立てる。

冬馬「これは夏海も知らない。今まで黙ってごめん……」

春樹「……じゃあ、冬馬のせいでお父さんたち、死んじゃったんだ……」

と、ポツリと呟く。

しんとする室内。

冬馬、罪を受け入れるように瞳を閉じる。

春樹「なんて、言うわけないじゃん」

冬馬、驚いて目を開けて春樹の方を見る。

春樹「オレもねえちゃんも、お父さんとお母さんだって、そんなこと思わないし。だから冬馬のせいなんかじゃない！」

と、断言して冬馬の肩に手を置く。

しかし冬馬は複雑な表情で夏海を見つめる。

× × ×

夏海のベッドに寄りかかって眠る春樹。

春樹の肩にブランケットをかけ、冬馬は病室を出る。

○ 同・廊下（デイルーム（夜））

誰もいないデイルームに冬馬が座っている、炭酸飲料を三本持った凧がやってくる。

冬馬、目を丸くする。

冬馬「帰ったんじゃ……」

凧「バイクとり行ってた。（周囲を見て）一人か？」

冬馬「……春樹は夏海の所で寝てる」

凧「じゃあこれは明日の朝だな」

凧、冬馬にペットボトルを二本差し出す。

冬馬「……どうも」

と、受け取る。

凜、冬馬の隣にひと席開けて座り、炭

酸を飲んで一息つく。

沈黙に耐えきれず、冬馬が口を開く。

冬馬「……なんでこの病院のこと……？　そ

んなに近いわけでもないのに」

凜「昔母親が入院してたことがあったからそれです」

冬馬「なるほど……」

再び沈黙。思い詰めた表情で一点を見つめる冬馬。

凜「……心配すんな。点滴もしたし、一晩休めば良くなるって医者も言ってたろ」

冬馬、首を横に振る。

冬馬「俺が救急車呼べたら、もっと早く病院に連れて来れたのに……俺は怖くてできなかった。夏海は常に俺たちのために頑張ってくれてるのに、俺は自分のことばっかで、結局夏海に無理させて。自分が情けなく、結局ムカついてくる」

冬馬の目に涙がにじむ。

冬馬 M 「俺、なんでこんな話してんだ」

冬馬、涙が溢れないように唇を強く噛み締めて堪える。

凜 「・・・事情はよく分かんねえけど、でも夏海がこうして今病院に来れたのは、お前が一人で抱え込まずに、ちゃんと『助けて』って言ったからだぞ」

冬馬、目を瞬かせて凜の方を見る。

凜 「だから情けないなんて思わなくていい。

お前は十分頼りになる弟だよ。よく頑張ったな」

冬馬 「なんだよそれ……」

と、咄嗟に顔を逸らす。

その口角は小さく上がっている。

○ 同・デイルーム（朝）

窓から朝日が差し込み、デイルームに柔らかな光が広がる。椅子に座ったまま眠っている冬馬。凜の姿はない。

そこへ春樹が走って呼びにくる。

春樹「冬馬！！　ねえちゃん起きたよ！」

冬馬は目を開ける。一席開けた隣の席に座っていたはずの凛の姿はないが、冬馬の肩には凛が着ていた薄手のジャケットがかけられ、机の上には凛からもらった炭酸飲料のペットボトルが二本と、「バイト行ってくる」というメモ書きが残されている。

冬馬 M「夢、じゃなかったな」

冬馬、凛との会話を思い出して少し口角を上げる。

春樹「あー！　冬馬ジュース買ってる！」

冬馬「……アイツが買ってくれた。春樹にも」と、春樹の分のペットボトルを一本渡す。

春樹「アイツって、りんいたの！？」

冬馬、頷く。

冬馬「ちゃんと礼言わないとな……」
と、呟く。

○マンション・本田家・リビング

病院から帰ってきた夏海たち。

春樹「うんこー！」

と、トイレに駆け込む。

夏海「はいはい行ってらっしゃい」

と、呆れたように笑う。

冬馬「……夏海」

と、改まる。

夏海「ん？」

冬馬「前にアイツ……西山凜とは関わらない

でほしいうって言ったけど……あれ、撤回す

る」

夏海「へ嬉しそうに」冬馬……！」

と、満面の笑みを浮かべる。

冬馬「へ慌てて」でも完全に信用したわけじ

やないからな！もし夏海のこと傷つけた

ら、俺がぶん殴る」

そこへ、トイレから出てきた春樹が会

話にまざる。

春樹「冬馬のパンチとかぜんぜんこわくない

けど」

と、笑う。

冬馬「すぐメソメソ泣いてたのはどこのどいつだよ」

夏海「そうそう。顔べしよべしよになるくらい泣きながら走ってきて、冬馬に何されたか一生懸命話してくれるんだけど、泣きすぎてて何言ってるかよく分かんなかったんだよね」

と、懐かしそうに笑う。

春樹「へ恥ずかしそうに」それは子どもの時の話じゃん！」

冬馬「今もお子様だろ」

と、鼻で笑う。

夏海「だけど冬馬もその後お父さんに『自分より弱い相手に手を出すのは卑怯者のすることだ』って怒られて、お母さんの所で泣いてたんだよね。可愛かったなあ」

春樹「冬馬だって人のこと言えないじゃん」
と、大爆笑。

冬馬「……覚えてない」

と、耳を赤くする。

夏海、慈しむような眼差しで二人を見つめる。

夏海「二人のお姉ちゃんになれて、私は本当に幸せ者だなあ」

と、しみじみ。

冬馬と春樹、顔を見合わせる。

冬馬「それは俺たちのセリフだよ」

春樹「ねえちゃんがオレたちのねえちゃんです

よかったです！」

夏海「ありがとう二人とも」

と、愛おしそうに冬馬と春樹をハグする。

夏海の腕の中で照れくさそうな二人。

○入谷高校・校舎前（夕方）

聖也、龍太郎、拓海が会話をしながら校舎から出てくる。

聖也「今日どこ行く？」

龍太郎「とりあえずなんか食おーよ」

聖也「じゃあ駅前のサイゼだな」

拓海、校門の所に立っている制服を着

た男子中学生に気づく。

拓海「あれって本田さんの弟？」

聖也「ほんとだ。おーーーい！」

と、校門に立っている冬馬の元へ走る。

聖也「冬馬だっけ。どうした？」

龍太郎「なっちゃんならバイト行ったぞ」

冬馬「そうじゃなくて、今日は……」

と、キヨロキヨロする。

拓海「凜ならもうすぐ来ると思う。ほら」

拓海が指差す方から凜がバイクを押し

て歩いてくる。

聖也「凜に用があんだって」

凜「俺？」

冬馬、コクリと頷く。

冬馬「この前はありがとうございました」

凜「礼言われるほどのことはしてねえよ。元

気になって良かったな」

冬馬「・・・正直に言うのと、夏海とは関わらないでほしいと思ってた。ヤンキーなんてチャラくてガラ悪くて、全員ロクなやつじゃないし、どうせ夏海みたいなタイプが珍しくて面白がられてるだけだって」

凜「実際その通りだからな。否定はしねえ」

冬馬「でも夏海は凜さん——アンタのこと、みんなのこと、すごく大事に思ってたんだよ……だから俺も信じることにした」

聖也「どうしよ、オレ今けっこう泣きそうなんだけど」

龍太郎「俺らなっちゃんに愛されてんだな」

冬馬、頷く。

冬馬「真面目でしっかり者だけど、たまに抜けてて、困ってる人間がいたらどんな奴だろうとほっとけないおせっかいでお人好しな姉だけど、これからもどうかよろしくお願いします」

と、頭を深々と下げる。

聖也「任せとけ！ なっちゃんは俺たちがち

ちゃんと面倒見るから！」

と、冬馬の頭を撫でる。

龍太郎「一番面倒見てもらってるやつが何言
ってんだよ」

と、聖也の頭を拳でぐりぐりする。

聖也「いや、それな！」

と、二人のコントのようなやりとり

小さく笑う冬馬。

拓海「もう十分伝わってると思うけど、俺ら

にとっても、本田さんは大事な仲間だから

冬馬、拓海の言葉を噛み締めるように

頷く。

冬馬「ありがとうございます。話せて良かった
です。じゃあ俺はこれで」

と、会釈して歩いて行く。

その背中に向かって、

凜「冬馬……！」

と、声をかける。

冬馬、足を止めて振り返る。

凜「……困ったことがあればいつでも連絡し

ろよ」

その言葉に冬馬は目を丸くする。

凜「へぶっきらぼうに」それと……今度から

“凜”でいい」

聖也、龍太郎、拓海の三人は頬を緩めて見守る。

冬馬、口元に小さく笑みを浮かべ、

冬馬「ありがとう……凜！」

と、大きく手を挙げる。

（了）